

はじめての万葉集

日本に現存する最古の和歌集「万葉集」を
分かりやすくご紹介します

vol.148

うち渡す
竹田の原に
鳴く鶴の
間無く時無し
わが恋ふらくは

大伴坂上郎女 (巻四・七六〇番歌)

訳

広々とつづく竹田の原に鳴く鶴のよ
うに、絶え間もないことよ。私の恋し
く思うことは。

竹田の庄

この歌は「大伴坂上郎女の竹田庄より女子の大嬢に贈れる
歌二首」と題された中の一首です。

作者である大伴坂上郎女は、元号「令和」の元となった梅花の
宴の主催者・大伴旅人の妹で、『万葉集』の編纂者のひとりとい
われる大伴家持の叔母にあたる人物です。歌を贈られた「大嬢」と
は、坂上郎女の実の娘であり、のちに家持の妻となった女性でした。
母から娘へ贈られた歌なのですが、会えない時間を嘆き「間
無く時無しわが恋ふらくは」と、まるで恋人に宛てたような
表現を用いています。そのためか、この歌は恋の歌だけを集めた
『万葉集』巻四に収められています。

『万葉集』巻四は、「相聞」だけで構成された特徴的な巻で
す。「相聞」とは互いの消息をたずね合う意味を持つことばで、
相聞歌といえば恋の歌と言って過言ではありません。二首目の
七六一番歌も同様に、恋の歌のような表現がみられます。坂上
郎女は、甥の家持とも恋人同士のような歌を交わしており、歌
作りの基本作法として恋の歌の表現を用いていた可能性が指摘
されています。

この歌の舞台となった竹田庄とは、現在の奈良県橿原市東竹
田町の地にあつた大伴氏が所有する田地と考えられています。坂
上郎女はたびたびここを訪れていたとみられ、ほかに竹田庄で
詠んだ歌(巻八・一五九一、一五九三)が残っています。家持も同
地を訪れ、坂上郎女へ「玉梓の道は遠けどはしきやし妹を相見に
出でてそ我が来し(玉梓の道は遠いのだが、なつかしいあなたに逢
いに、私は出かけて来ました)」(巻八・二六一九)という歌を贈り
ました。遠いところを会いに来たというのも恋の常套表現でした。

(本文 万葉文化館 井上さやか)

万葉文化館イベント情報

開館25周年記念

万葉古代学リレー講座 無料・申込不要

●「隋書」にみる推古朝

9月5日(土)

「講師」松尾光さん(奈良県立万葉文化館
名誉研究員・元万葉古代学研究所
副所長)

●「讀アスカ」

9月20日(日)

※「万葉の日」記念／「昭和100年」記念

「講師」中西進さん(奈良県立万葉文化館
初代館長)

「時間」各回14時～15時30分(13時30分開場)

「定員」各回300人(当日先着)

「会場」各回日本画展示室



万葉集をよむ 無料・申込不要

9月16日(水) 14時～15時30分

「雑歌(6)」

(巻9・1738～1743番歌)

「講師」榎戸涉吾(当館研究員)

「定員」150人(先着)

※アーカイブ配信

(翌日から1週間視聴可)

にぎわいフェスタ万葉秋

9月15日(火)～11月29日(日)

※8月1日より、当館駐車場は有料
になりました。

普通車1日1回につき500円

※詳しくは当館HPをご覧ください。



奈良県立万葉文化館

☎ 0744-54-1850

HP www.pref.nara.lg.jp/manyo